

# 第五回 邦 樂 演 奏 会

'75都民芸術フェスティバル

第一 生命ホール

第一部 第二部 十二時半開演 四時終演  
四時半開演 八時終演

昭和五十年二月九日(日)

後援 東京都

(五十音順)

社団法人 日本三曲協会

文京区白山五の二十六の十二

電話 (九四二) 二三七六番

常磐津協会

中央区銀座八の十一の九

電話 (五七二) 四九四五番

清元協会

港区南青山二の十七の十三の一〇二

電話 (四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館

電話 (五七二) 〇二一六番

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二  
新橋演舞場別館

電話 (五四一) 五四七一一番



東京都知事 美濃部亮吉

「邦楽演奏会」によせて

東京すぐれた芸術の創造をたすけたい、そしてその成果を少しでも都民の身近かにおきたい、そうねがつて始めた東京都助成公演もことしで七年目、毎年多くの芸術団体と観客の意欲にみちた参加により、都民の文化生活にいつそいろどりを添えてきました。

ベートーヴェンは「莊嚴ミサ」の楽譜のあるくだりに、この音楽は心から出たものだから心にかえってほしいという意味のことを書いているそうです。心から心へ—それは音楽にかぎらず、あらゆる芸術の魂の消息を伝える言葉でしょう。

東京都に青空を回復したい。そのことは今も変わらない私の強い念願です。同じように強く、私は東京の人的心にも青空がほしいと思います。

詩人ジョン・キーツの言うとおり、美しいものは永遠のよろこびです。私は、はげしい公害やインフレや交通地獄の中で、東京に真の人間のまち、人間の生活を復興しようとしたかつている都民のみなさんに、助成公演の提供するゆたかな芸術から深いこいと励ましを受けとつてほしいとねがいます。また、その公演の一つである「邦楽演奏会」が、そのための大きな一役を演ずることを期待しています。

第一部番組（十二時半開演）

一、一中節 式三番 岩戸神樂

淨瑠璃 同 宇治文紫葉  
宇治文彩葉

二、義太夫 稲川内 関取千両幟

三味線 同 宇治文紫葉  
宇治文佳喜

稻川内

稻川内  
おとわ  
鉄ヶ嶽  
呼出し  
大阪屋  
竹竹竹竹本本本本  
豊鶴澤澤本本本本  
路素之助春駒重之助  
公三治生駒之助

三、常磐津 大序 鶴ヶ岡の段  
仮名手本忠臣蔵

淨瑠璃 同 同 常磐津 文字太夫  
常磐津 須磨太夫  
常磐津 小文太夫  
常磐津 八重太夫

三味線 同 上調子 常磐津 菊三  
常磐津 菊三郎

四、三曲迎 春 賦

第二部 第二部 第一部 第一部  
西高中阿久津井本  
谷木村敏康和峯寿多恵  
敏千代延敏和峯寿多恵

箏低音 第二部 第一部 第一部  
米佐越小中米 川取智林川川  
めぐみ敏敏敏裕賀寿美弓華枝 子

第二部番組（四時半開演）

一、義太夫 野崎村の段

新版歌祭文

久お母お久  
松染光作  
竹竹竹竹  
本本本本  
朝春素越系  
重華八道三

二、荻江深川八景

同同同唄  
荻荻荻荻  
江江江江  
いりみち  
とよをか

同胡同三味線  
弓  
豊豊鶴豊  
澤澤澤澤  
公公公津仙  
佳治純昇廣

同同同三味線  
荻荻荻荻  
江江江江  
み千とさ  
な代きわ

三、長唄臥



同唄  
皆西垣勇藏  
川垣健蔵

猫

同三味線  
杵杵屋屋  
五三遊



四、三曲小山田検校作曲

箒

岸高富高真藤  
辺柳安羽鍋井  
美千花賀洋季代賀  
千賀

百代

曲

五、三曲五段  
光崎検校 作曲

箒低音

渡大清福佐々木坂  
辺竹田操操操操操操  
叢操操操操操操操  
寅和峰紅寿子

箒高音

尺八川内吉野  
川瀬藤村山村花坂  
順操操操操操操  
輔操奈々穗朱紫舟寿

六、清元道行浮堺鷗（お染）

淨瑠璃淨瑠璃  
清清清元  
元清美太夫  
美月太夫  
美寿太夫

三味線同上調子  
清清清元  
元美多郎  
一寿郎

七、常磐津花舞台霞の猿曳（うつぼ猿）

淨瑠璃  
常磐津常磐津常磐津  
常磐津常磐津常磐津  
初勢千勢宮尾千東勢太夫  
太夫太夫太夫太夫

同同三味線

常磐津常磐津常磐津

八百八文字兵衛

同

# 歌詞と解説（演奏順）

## 第一部

### 一、一中節 式二番山石戸神樂

しきさんばいわとかぐら

一中節というものは、元禄のころ京都で生れた淨るりで、邦樂の中では古いものです。それがやがて江戸に移され、現在では、都、菅野、宇治の三派があります。一中節は邦樂の古典といわれ、格調の高さを誇っています。

この曲は、宇治派ができたころ、つまり幕末に近いころに作られた曲ですが、神代の岩戸開きの伝説を主台にして、大らかにめでたさをうたいあげております。この演奏会の開幕にふさわしい、莊重で優雅な曲であります。

### 二、義太夫 稲川内の九段

関取千両職

いながわうちのだん

近松半二、三好松洛ほかの合作で、明和四年（一七六七）八月、大阪竹本座で初演された。當時大阪で人気の高かった力士の稻川と千田川をモデルにした作品。全部で九段という長篇で筋も複雑であるが、この二段目がとくに有名で、現在もこの二段目だけが上演される。

鶴屋の若旦那礼三郎が遊女の錦木におぼれ、身請けしようとしたところが、その金を悪人たちにだまされて、とられてしまう。礼三郎の父淨久に恩義のある力士稻川は、錦木身請けのあと金二百両を、今日中に払うことになる。ところが、その都合がつかず、このままだと錦木を悪侍の九平太にとられてしまうことになる。そしてその九平太の手先に、力士の鉄ヶ嶽がいるので、互いの意地の張り合いになる。そこから今日のこの場面になる。

（芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞台、堀江々々と国々へ、鳴りひびきたる稻川が、相撲のうちは夫婦連れ、ここに堀江の仮り住居、店は初日の飾り物、半紙毛氈煙管盆、羽織脇差し取り禪、酒は杉葉へ米俵、よその軒端をかり初めの、賑々しくぞ見えにける。町中の品質に肩も稻川が、鉄ヶ嶽多右衛門と、打ち連れ帰るわが家の内、詞おおこちの人、戻らしやんしたか、陀多右衛門様ようおいで、初日からまだお目にかかりませぬが、きつい大入りで、おめでとうござります、あいそりやもう互いでござんす、見物の足が早さに、そろそろ行こうと出かけた道で、稻川に逢うたによつて、それでちよつと寄りました、それはまあ／＼よいこそおいで、したがまだようようと今の先櫓太鼓を打ち出しました、まああるかいの陀多右衛門、さあおれも初日に鈍な相撲を取つたよつて、何でも今日はと思うているが、誰と合わすか、相手によつては魂胆

よそ千年の鶴は、萬歳樂をうとうたり。『青にさて青丹よし、奈良の都の春日山、かけも新に慈悲万行、七五三の歩みの大事、十五の拍子とりどりに、『萬代の池の亀は、甲に三極をいただいたり、滝の水れいれいと落ちて、夜の月鮮やかに浮かんだり、渚の砂さくさくとして、あしたの日の色を朗す。』天下泰平、国土安穏の、『今日の御祈禱なり、在原や芦原や、なじよその翁とも、あれはなじよの翁とも、そよやいづくの翁、とうどうそよや。』千秋萬歳悦びの舞なれば、一とさし舞おう萬歳樂、萬歳樂、萬歳樂。』長久田満息延命、今日の御祈禱なり。『おさえおさえの喜びありや、わがこの所より外へはやらじと思う。』物の音色につれて、立ち舞う御忌衣、『千歳は近江なる白鷺の御神なり。』黒き尉は住吉の御本神、『鼓は波のどうと打つ、音は高天が原なれや、岩戸に向う神かぐら。』保曾呂久勢利と吹く笛も、ひいやひしきの音色まで、春の霞の立ち姿。『あらめでたや、ものに心得たるあとの太夫殿に、そげんぞう申そう。』ちようど参つて候。『誰がお立ちにて候ぞ。』あとと仰せ候ほどに、それが御あとのために罷り立つて候。今日の三番叟、猿樂きりきり、尋常に舞うておりそえ、色の黒い尉どの。『この色の黒い尉が、今日の御祈禱、千秋萬歳この所繁昌と、舞い納めうずる事は、なによりもつて易う候。』まずあとの太夫殿には、もとの座敷へ重々と御直り候え。『それがしもとの座敷へ直ろうする事は、尉殿の舞いよりもいと易う候。』御舞いのうては直り候まじ。『あらようがましや、さあらば鈴を参らしよう。』そなたこそ。『初日は諸願満足に円満、二日の日はまた二つ柱、細女命が舞の袖。』臯月のさ、女房が笠の端をつらねて、早苗おつとり打ちあげて踊つたに、『千町萬町、億萬町、田をばそんぶりぞ、田をばそんぶりぞ。』そんぶり／＼そんぶりぞ。『御田を植えるならば、笠買うて着しようぞ。』笠買うて給るならば、なおも田を植えよ。『三日は福德寿福円満、子福人の子宝、車座に並べた。』へたつまついるまつかいつくひつつく火打袋をぶらりとつけて候ぞ、この式三の故実にて、三日これを舞うとかや。『三社の神の舞樂より、國常闍のほがらかに、人の面も白々と、面白やの詞をはじめ、今人の世の俳優に、神という字のへんをとり、申樂と申すこそ、げに恐れあり神遊び。四海波風治まりて、萬砂の松の葉も、ちりやたらりは眞言秘密狂言綺語の道直ぐに、讚仏乗の因縁いわれ、脳能修羅事、かつら事、柳は緑花は紅かず数や、『浜の真砂は尽きるとも、つきせぬ和歌を散島の、神の教えの国津民、治まる家こそ久しけれ。』

もらぬか、どうぞ俺を九平太様へ連れて行て、あなたの胸の暗れるよう打たしなりとまた踏ましなりとさして、身請けはこつちへきしてたも、もわがみのいやる通り、金すくの事なれば、今日中に跡金さえ出来れば頼む事も何もなけれど、さちつと急にはできにない、もつとも在所へいうてやつたら、工面のできる事もあるうが、親どもの耳には入れとむない、それでわがみを頼むのじや、またせつかく身請けしやつてからが、とても太夫が九平太様の女房にやならぬ、すりやこれ畢竟が費えとうとも、この稻川をどうなりと、腹の癌るようにして、どうぞ身請けをさしてたも、一生の頬みじや、恩にも着よ、これ手を下げる鉄ヶ嶽と、頭を疊にすりつけて、頼む心ぞせつなけれ。詞むむ、そんならなにか、踏まれてもぶたれても、わりやいいぶんはないというのか。いやもききわけてさえたもれば、たとえこの身はどうなつても。むむ、や、こりや相談が面白い、あの九平太様の名代に、まあちよとこうしようかいと、立ち蹴にどうと踏みとばし、詞何じや／＼、何をびこ／＼さらすのじや、ええわりやたつた今、いいぶんないというたぞよ、ただしいぶんがあるのか、いやさ何のいいぶんがあるもので、あるまい／＼、何のあろうぞい、恵海庵での意趣返し、わりや九平太様をこうくらわしたか、や、こう踏んだか／＼と、弱みをつけ込む厄病の、髪も頭も引きしやなぐり、さいさむ折から表へ息せき、詞はい今日の相撲割りでござります、もうおつけ土俵入りじやほどに、早うお出でなされませと、書き付けほり込み立ち帰れば、陀多右衛門おし開き、詞何じや、鉄ヶ嶽に稻川。むむ、すりや今日の相撲は、こりや見い、俺とわれとが相撲じやとやい、時も時、折も折、わがみと俺が立ち合いとは、はて気味合いな事じやのと、いうも心に一思案。詞こりや、われも池田の稻川といわれては、国々へ名の通つた者、また俺も大名のお抱え、ことに大阪は初めてなれば、この相撲しくじるが最後、扶持ばなれじや、すりやこれ、二人ながら大事にな金に手詰まつて、難儀さしやんすがわしや悲しいわいな／＼。いつそこのわけ親父様に。詞たわけめが、そういう程ならばこのように、人になたかれ踏まればせぬわい。昔かたぎの親父様、打ちあけてものいうと、礼三様に意見の何とやかましい。若いお人の水の出端、もし命生害になつた時は、な、こりや千日に薦つた萱じやわい。ああ急な事でさえなくば、工面のしょもあろうに、わざか二百両の金ゆえに、大事の相撲を振つてやらざなるまいと思え、ふがないやら口惜しいやらで、おりや胸がさけるようなわい／＼。おお道理でござんす、もつともでござんすいわ、相撲取りを男に持てば、江戸長崎や國々へ、行かしやんすりやそのあと、留守はなおさら女気の、ひとりくよ／＼物案じ、夫に怪我のないようにと、祈る神様仏様、妙見様へ精進も、戻らしやんして土俵入りでござります、早うおいでなされませ、ちやつと／＼に是非もなく。詞女房ども行てくるぞや。ええそんならどうでも行かしやんすか。ほほ鉄ヶ嶽を抱き込んで、工面通り行きや格別、もしも行かねば絶体絶命、ええ、こりやこれが暇乞いになろうも知れぬ、さらばとばかり一声を、跡に残して出でて行く、これのう待つて下さんせ、たつた一言いいたい事、稻川殿／＼と、見れどもあとは雲霞。詞夫の命にかかる大事、こりやこうしてはいられぬと、帶引きしめて夫のあと、慕うてこそ。

の出会い、何でも鉄ヶ嶽を土俵の砂へ埋まにやおかぬ。いやそりや嘘じや、今日の相撲は鉄ヶ嶽に振つてやるお前の心。こりや声が高い、すりやさつきにからの様子残らず。あい、一間できいておりました、わざかな金に手詰まつて、難儀さしやんすがわしや悲しいわいな／＼。いつそこのわけ親父様に。詞たわけめが、そういう程ならばこのように、人になたかれ踏まればせぬわい。昔かたぎの親父様、打ちあけてものいうと、礼三様に意見の何とやかましい。若いお人の水の出端、もし命生害になつた時は、な、こりや千日に薦つた萱じやわい。ああ急な事でさえなくば、工面のしょもあろうに、わざか二百両の金ゆえに、大事の相撲を振つてやらざなるまいと思え、ふがないやら口惜しいやらで、おりや胸がさけるようなわい／＼。おお道理でござんす、もつともでござんすいわ、相撲取りを男に持てば、江戸長崎や國々へ、行かしやんすりやそのあと、留守はなおさら女気の、ひとりくよ／＼物案じ、夫に怪我のないようにと、祈る神様仏様、妙見様へ精進も、戻らしやんして顔見るまで、案じて夜を寝ぬ女房の、今このせつなる苦しみを、連れ添う私にいわしやんせぬ、お前はそれほどつれないと、女夫になつた今までを、数え立て／＼、怨み涙に時移り、はや追い／＼の呼び使い、詞申し土俵入りでござります、早うおいでなされませ、ちやつと／＼に是非もなく。詞女房ども行てくるぞや。ええそんならどうでも行かしやんすか。ほほ鉄ヶ嶽を抱き込んで、工面通り行きや格別、もしも行かねば絶体絶命、ええ、こりやこれが暇乞いになろうも知れぬ、さらばとばかり

て、重ねて土俵踏む事はならぬぞよ、どうぞ頭取衆を頼んで、振り替えて貰うてなりと、とらぬ方が勝ちである、が、それともにとつてみようと思うなら、さ魚心あれば水心。な、稻川、土俵で逢おうと、強いことはどこやらに、味な鉄棒引きする雪踏、がらつかせてぞ、詞こりや稻川、それ今いうた魚心あればな、水心、必ず忘れてくれなよ、ははははは、出でて行く。あとに稻川双手を組み、思案にくれていたりしが、詞だん／＼日限の切れた跡金、親方が催足するも九平太がみなしわざ、とかく鉄ヶ嶽を抱き込んで、あつちの身請けをのばして貰おうより外はな。というても、筋繩ではいかぬ奴、抱き込むしようは、むむ、太夫が身請けは俺次第、魚心あれば水心、おおこりや今日の相撲をふつてやらざなるまいわの、それ／＼、あれと俺とが立ち合つこそ幸い、美しゆう振つてやり、あいつに勝ちをゆずつておいて、その上でのつべきさせず、頼むが近道上分別、とはいえ名取の鉄ヶ嶽、どうこんたんしてなりとも、身請けは俺次第、魚心あれば水心、おおこりや今日の相撲を金ゆえに、投げねばならぬ晴れの相撲、いわば一生懸命の、大事の相撲を金ゆえに、振つてやる稻川が心の内せつなさ、汚なさ、摩利支天にも見放され、相撲冥加に尽きたかと、思わず拳を握りしめ、身をふるわして男泣き。始終立ち聞く女房が、涙かくして、詞おお、こちの人とした事が、さつきにから飯こしらえて待つてゐるのに、ここであがるか奥へすようかと、なげなければそしらぬ顔、詞いやも飯なら食いとうない、やほんに相撲から呼びにきた、どれ行てこうと立ち上れば、詞これ待たしやんせ、それ、髪がきつう乱れてあるぞえ、人中へ見苦しい、結うてあげようを取り出す梳箱。詞いや／＼結うていたら隙がいる、つい撫でつけておいても、おおお前もこんな髪して行かしやんした事はないが、いつそのこと何もかもいうて聞かして下さんせぬか。詞や、いえとは何を。さいな、お前の心のな、それもつれ髪、撫でつけておこうより、詞いつそ取り出で梳箱。詞いや／＼結うていたら隙がいる、つい撫でつけておいても、おおお前もこんな髪して行かしやんした事はないが、いつそのこと何もかもいうて聞かして下さんせぬか。詞や、いえとは何を。さいな、お前の心のな、それもつれ髪、髪のほつれを撫でつける、櫛の背より夫の胸、うつしてみたき鏡立て、詞さようか見さしやんせと、向う鏡のふた取つて、映せばうつる顔と顔。詞申し稻川殿、色も青ざめ、そしてまあ、目の中もうるんで、どうやら氣色の悪そうなお顔付き、もう今日の相撲へは、断りいうて下んすな、詞何をあんだらつくすぞい、いつはともあれ今日の相撲、鉄ヶ嶽とこの稻川、初日の出ぬ先から、町中が待つてゐる晴れ

そのもとは義太夫で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作で、寛延元年（一七四八）八月、大阪竹本座で初演され、その後まもなく歌舞伎に移されて獨得の発達をとげた。

今日演奏される「大序、鶴ヶ岡の段」は、その発端にあたる部分で、大切な場面。これは明治初年、常磐津小文字太夫が義太夫から常磐津に直したものと伝えられている。

鶴ヶ岡八幡宮の造営が成ったので、足利左兵衛督直義は將軍尊氏の代参として東下し、新田義貞が討死のとき着用していた兜を宝蔵に納めることになる。その鑑定人として、かつて義貞に仕えていた塩谷判官高定の妻顔世御前を召し出だす。顔世御前は、数ある兜の中から蘭奢待の名香をたきしめた竜頭の五枚兜をえらび出し、直義は塩谷、桃井とこれを納めに立つ。残つた高の師直は顔世を呼びとめ、歌の添削に託して艶書をわたして迫る。

そこへ桃井若狭之助が来合せ、顔世を助ける。師直が怒つて悪口をいうので、若狭之助が憤慨するところまで。

## 三、 常磐津 大序 鶴ヶ岡の段

仮名手本忠臣蔵

だいじよつるがおか

だん

「忠臣蔵」については、とくにあらためて記すこともあるまい。日本の代表的な舞台作品で、上演回数ももつとも多く、誰にも親しまれている。

は、これはまつたく尊氏公の御計略、新田の徒党の討ち洩らされ、御仁徳を感じ、攻めずして降参さる御てだてと存じ奉れば、無用の御評議卒爾なり。へど、いわせも果てず、やあ師直に向かつて卒爾とは出過ぎたり、義貞討死したる時は、大わらわ、死骸のそばに落ち散つたる兎の数は四十七、どれがどうとも見知らぬ兎、そうであろうと思うのを、こわ御尤なる御評議ながら、桃井殿の申さるるも治まる代の軍法、これ奉納したその後で、そでない時や大きな恥、なま若輩なりをして、お尋ねもなき評議、すつこんでおいやれと、御前よきまま出るまに、杭とは思わぬ言葉の大槌、へ打ちこまれてせき立つ色目、へ塙引きとり召し連れよといいつけし、これへ招けとありければ、へはと答えの程もなく、へ馬場の白砂素足にて、裾で庭掃くうちかけは、神の御前のお玉簾、玉もあざむく薄化粧、塙谷が妻の顔世御前、はるか下つて畏こまるへ女好きの師直、そのまま声かけ、塙谷殿の御内室顔世殿、さいせんよりさぞ待ち遠、御大儀々々、御前のお召し、近づくと取り持ち顔。へ直義御覽じ、召し出すこと外ならず、いんじ元弘の乱れに、後醍醐帝都にて、召されし兎を義貞に賜わつたれば、最後の時に着つらんこと疑いはなけれども、その兎を誰あつて、見知る人ほかなし。その頃は塙谷が妻、十二の内侍のそのうちにて、兵庫の司の女官なりときき及ぶ。さぞ見知りあらんす、覚えあらば兎の本阿弥、へめきき目利きと女子にて、蘭奢待という名香を添えて賜わる。お取り次ぎはすなわち顔世。その時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、この蘭奢待を思ふまゝ、内兜に炷きしめ着るならば、髪の髪に香りをとめて、名香かおる首取りしという者あらば、義貞が最後と思し召されよとの言葉は、よもや違うまじ。へ申し上げたる口もとに、へ下心ある師直は、小鼻いからし聞きたる。へ直義くわしくきこしめし、おおつまびらかなる顔世が返答、さあらんといひし故、落ち散つたる兎四十七、この唐櫃に入れて置きたり。見分けさせよと御上意の下侍、かがむる腰の海老鉢を、あける間おそと取り出だすを、へおめず臆せず立ちよつて、見れば所名にし負う、鎌倉山の星兜、とつぱい頭、獅子頭、さて指物は家々の、儀儀々々によるぞかし、あるいは直平、筋兜、鎧のなきは弓のため、そ

の主々の好みとて、數々多きその中に、五枚兜の龍頭、これぞといわ  
ぬそのうちに、はつと薰りし名香は、顔世がなれし義貞の、兜にて御座  
候と差し出だせば、へさよくならめと一決し、塩谷桃井兩人は、宝藏に  
納むべし、こなたへ来れと御座を立ち、顔世にお暇賜わりて、段がつら  
を過ぎ給えば、へ塩谷桃井兩人も、うちつれてこそ入りにける。へあとに  
顔世はつぎ穂なく、へ師直様には今しばし御苦勞ながら、御役目をお仕  
舞いあつてお静かに、お暇の出たこの顔世、長居はおそれおさらばと、  
立ち上る。へ袖すりよつてじつと控え、これまあお待ち待ち給え、今日  
の御用しまい次第、そのもとへ推参して、お目にかける物がある。幸い  
のよい所、召し出だされた直義公は、わがための結ぶの神、御存知の如  
くわれら歌道に心をよせ、吉田の兼好を師範と頼み、日々の状通、その  
もとへ届けくれよと聞い合せのこの書状、いかにもとの御返事は、御口  
上でも苦しゆうないと、袂から袂へ入るる結び文、顔に似合わぬ様參る、  
武藏鑑と書いたるを、へ見るよりはつと思えども、はしたのう恥しめて  
は、かえつて夫の名の出る事、もち帰つて夫に見しようか、いやへ、  
それでは塩谷殿憎しと思う心から、怪我あやまちにもなろう。ものをも  
いわす投げ返す。へ人に見せじと手に取りあげ、戻すさえ手にふれたり  
と思うにそ、わが文ながら捨てもおかねず、くどうはいわぬ、よい返事  
きくまでは、くどいて口説いて、くどきぬく、天下を立てうと伏しよう  
とも、ままな師直、塩谷を生きようと殺そうとも、顔世の心たつた一つ、  
何とそ�ではあるまいかと、へきくに顔世が返答も、涙ぐみたるばかり  
なり。へおりから來合す若狭の助、例の非道と見て取る氣転、顔世殿ま  
だ退出なされぬか、お暇出でてひまどらば、かえつて上への恐れ、はや  
お帰りと追い立つれば、へきやつさては気取りしと、弱味をくわぬ高  
師直、やあまたしてもいわれぬ出過ぎ、立つてよければ身が立たず、こ  
のたびのお役目首尾よう勤めさせられよと、塩谷が内證顔世の頼み、こ  
りやそななくてかなわぬはず、大名でさえあの通り、小身者に捨て知行、  
誰がかけで取らする、師直が口一つで、御器さぎようも知れぬ危ない身  
代、それでも武士と思うじやまでと、邪魔の返報憎て口。へくわつとせ  
き立つ若狭の助、刀の鰐口碎くるほど、握りつめは詰めたれども、神前  
なり御前なりと、一旦の堪忍も、今一言が生き死にのことばの先手、  
へ還御ぞとお先を払つ声々に、へせんかたなくも期をのばす、無念は胸  
に忘られず、へ悪事さかつて運強く、切られぬ高の師直を、へあすの我  
が身の敵とも、へ知らぬ塩谷があとおさえ、へ直義公はゆう／＼と、歩

四、  
筝曲迎春  
米川敏子 作曲

米川敏子

賦六

昭和二十一年の作品。初めは高音箏と低音箏のための二部合奏曲として作られたが、あとから高音二部を加えて、三部合奏曲となつた。筝のための器楽曲で、春を迎える心をあらわしたもの。

前奏部で、高音一部の独奏により、春の訪れをあらわし、低音、高音二部の導入により春のわき立つ感をよみ、中ほどでは、春の嵐のさまを、高音二部が三拍子のリズムを刻みながら、高音一部、低音が各々メロディーを奏でつつ、嵐の過ぎ行くさまをあらわし、終曲となる。

少人数で二部合奏、あるいは本日のように多人数での三部合奏と、どちらにも奏される。また、演奏に使われる低音箏は、十七絃と異なり、十三絃の低音箏であるのは、作曲者得のものである。

御なり給つ御威勢、人の兜の龍頭、御藏に入れる数々も、四十七字のいふはわけ、仮名の兜を和らげて、兜頭巾のはこびぬ、国の捷ぞ久方の。

五、清元忍逢春雪解(三千歳)

河竹黙阿弥作詞、二世清元梅吉作曲。明治十四年三月、東京新富座上演の世話狂言「天衣紡上野初花」の第六幕「大口寮座敷の場」に出した狂言淨るり。

代々の、墓へ入れぬこの身の上、回向院の下邸へ、おれの墓を建ててくれ、これがおぬしへおれの頼みだ。

喜兵衛へこういううちに寸普尺魔、さわりのないうら早くお逃げなされませ、さあさあ、

「といえどこなたは水鳥の、浮寝の床の水離れ、葭芦原を立ちかねれば、  
げに桓山の悲しみも、かくやとばかり降る雪に、積る思いぞ残しける。」

を立ち出でて、

喜兵衛へこういううちにも寸普尺魔、さわりのないうら早くお逃げなされませ、さあさあ、

「といえどこなたは水鳥の、浮寝の床の水離れ、葭芦原を立ちかねれば、  
げに桓山の悲しみも、かくやとばかり降る雪に、積る思いぞ残しける。」

## 六、三曲梅の功

いさお

高橋等庵作詞、初代高橋栄清作曲。東明節の歌詞と同じなのでその移曲と間違えられることがあるが、まったく別の山田流箏曲歌物として、昭和初年に作られたもの。

中国の文人林逋の詩や、在原業平の和歌などをとり入れて、梅の良さ、美しさをほめたたえたもの。

「白きをば雪にたとえん、清きをば玉にたぐえん。けだかさは、羅浮の仙女をまのあたり見る心地する梅の花。同じ非情の草木の中に、結べる友垣も、変らぬ色を松と竹、唐も大和も昔より、梅を愛でに人々の、昔れは高く後の世に、清き香りを伝えけり。音清き、いささ流れに影見えて、さし交う枝に初月の光りほのかに、梅が香のただよう春の夕暮は、孤山の處士が唐歌に、高き調べをとどめつづけに千金にも変えじとは、この一時と知られたり。昔男も梅の花、今を盛りの春の夜に、五糸わたりの西の対、恋しき人を思い出で、月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身ひとつは元の身にしてと、花にもまがう面影を、しのびて思いを述べしかや。あらおもしろや梅の花、盛りになれば久方の、天ざる星のふるかと見えて、天地万物みな面白く、皆かんばしく打ち向かう、人の心も清しいうわし。」

## 七、長唄連獅子

れん

河竹黙阿弥作詞、三世杵屋正治郎作曲。明治五年五月東京村山座で「浪花鴻入江大塩」という大塩平八郎の芝居を上演したとき、その劇中劇という趣向で初演された。

その前、文久元年（一八六一）五月にできた二世杵屋勝三郎作曲の「連獅子」（俗に「勝三郎連獅子」という）を増補したもので、それより派手な曲となっている。

獅子というのは、想像の動物で、現実のライオンではあります。智恵を司る文殊菩薩は、お釈迦様の左側に位置し、獅子に乗るのを常としています。その文殊は清涼山に住み、そこに至るには、石橋を渡らなければならない。その石橋のたもとには、牡丹の花が咲き、獅子が舞い戯れているということになつていて。

その獅子の親が、子を谷底に落してその勇気をためし、やがてかけ上ってきた獅子を迎え、その元気を喜ぶという筋。莊重な中にも派手なところもあり、名曲として知られている本調子「それ牡丹は百花の王にして、獅子は百獸の長とかや、桃李にまさる牡丹花の、今を盛りに咲き満ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の、戯れ遊ぶ石の橋。」そもそもこれは尊くも、文殊菩薩のおわします、その名も高き清涼山、峨々たる巔に渡せるは、人のたくみにあらずして、おれとここにあらわれし、神変不思議の石橋は、へ雨後に映する虹に似て、虚空を渡るが如くなり。」上り峰を仰けば千丈の、雲より落つる滝の糸、谷を望めば千尋なる、底はいすこと白波や、巔に眠る荒獅子の、猛き心も牡丹花の、露を慕うて舞い遊ぶ、胡蝶に心やわらぎて、花にあらわれ葉に隠れ、追いつ追われつ余念なく、風に散りゆく花びらの、ひらりひらひら翼を追つて、共に狂うぞ面白き。本調子へ時しも簫笛琴笙篋の、妙なる調べ影向も、今いく程によも過ぎじ、かかる嶮岨の巔頭より、強臆ためす親獅子の、恵みも深き谷あいへ、蹴落す子獅子は、ころころころ、落つると見えしが身をひるがえし、爪をけたでてかけ登るを、また

突き落しつきおとされ、爪のたてども嵐吹く、木蔭にしばし休らいぬ。  
「登り得ざるは懶せしか、あら育てつる甲斐なやと、望む谷間は雲霧に、  
それともわかぬ八十瀬川、水にうつれる面影を、見るより子獅子は勇み立ち、翼なけれど飛びあがり、数丈の岩をなんなくも、かけあがりたる勢いは、目ざましくもまた勇ましし。  
「獅子団乱旋の舞楽のみきん、獅子団乱旋の舞楽のみきん、牡丹の花房勾い満ちみち、大巾利巾の獅子頭、打てや雌せや牡丹芳、牡丹芳、黄金の瑞あらわれて、花に戯れ枝に臥しまろび、げにも上なき獅子王の勢い、なびかぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞い納め、萬歳千秋と舞い納め、獅子の座にこそ直りけれ。」

## 一、義太夫野崎村の段

新版歌祭文

のさきむらだん

## 第二部

近松半二作、安永九年（一七八〇）九月、大阪竹本座初演。  
お染久松の実説には、油屋の丁稚久松が、幼児のお染を誤まって川へ落したいわけに自殺したというのと、別に心中事件があつたともいわれ、はつきりしない。  
それがいろいろに脚色され、歌舞伎や淨瑠璃で上演されてから有名になつた。なかでもこの「新版歌祭文」がとくに知られており、その上の巻「野崎村の段」は、情景、内容ともにそろつた佳作として、よく上演される。  
和泉の国石津の家臣で千五百石取の相良丈太夫は、主家の重宝吉光の守り刀を紛失した責任をとつて切腹する。残された六歳の遺児久松を乳母のお庄がひきとり、野崎村の兄久作のもとに預け、自身は刀をさがしている。久松は十歳の時、大阪の油屋へ奉公にやられ、やがてそこの娘のお染と恋仲になる。一方、久作は後妻の連れ子のお光と久松を夫婦にしようとしている。  
久松の父が死んで十三年目、久松はお染と忍び合つて、喧嘩にまきこまれ、金をかたりとられてしまう。久松は油屋の手代とともに久作の家へ帰り、久作に金を払つてもらう。ここからが今日の「野崎村の段」となる。  
なお、このあとで演奏される清元の「道行浮時鷗」（お染）は、これを江戸風に直したもの。上方と江戸の扱い方がわかつてなおもしろい。

あとに娘は気もいそいそと、日頃の願い叶つたも、天神様や観音様、第一は親のおかけ、詞ええ、こんな事なら今朝あたり、髪も結つておこりますこしらえも、祝う大根の友白髪、末菜刀と氣もいさみ、手もとも軽くちょき／＼ちょき、切つてもきれぬ恋衣や、本の白地をなまなかに、お染は思い久松が、あとを慕うて野崎村、堤伝いによようよと、梅を目に当に軒のつま、供のおよしが声高に、詞申し御寮人様、かの人に逢おうばかり、寒い時分の野崎参り、いま船の上り場で、教えて貰うた目じるしのこの梅、大かたここでござりましようぞえ、おおもそつと静かにいやいのう、久松に逢いたさに来事は来ても在所の事、目立つては気の毒、そなたは船へ、早う／＼と追いやり／＼、たち寄りながら越えかねる、恋の岬の敷居高く、詞物申しお頼み申しましようと、いうもこわごわ暖簾ごし、詞百姓のうちへあらたまつ、用があるなら入らしやんせ、はい／＼卒爾ながら、久作さんは内方でござんすかえ、さようなら大阪から久松という人が、今日もどつて見えたはず、ちよつと逢わして下さんせと、いうことばつきなりかたち、つねづねきいた油屋の、さてはお染と格気の初物、胸はもやもやかきませなます、また板おしやり戸口に立ちより、見れば見るほど美しい、詞あた可愛らしいその顔で、久松さんに逢わしてくれ、そんなお方はこちや知らぬ、よそを尋ねて見やしゃんせ、あほうらしいと腹立ち声、心付かねばほんにまあ、何ぞ土産と思うても急な事、これ／＼女子衆、さもしけれどもこれなりとも、夢にもそれと白玉か、露を帛紗に包みのまま、差し出だせばこりや何じやえ、大どこの御宵人さま、さま／＼といわれても、心がいたらぬおかしやんせ、在所の女子とあなどてか、欲しくばお前にやるわいなど、やら腹立ちに門口へ、はればほどけてばらく／＼と草にも露かねけし人形、みじんに香箱割り出した、中へつか／＼親子連れ、出てくる久作、詞どうじやなますはできたであろう、さて祝言のこと婆がきてきつい喜び、じやが年は寄るまいもの、さつきやつさもつさでとりのぼしたか頭痛もする、いこう肩がつかえてきた、ああ橙々の数は争われぬものじやわいの、さようならそろ／＼私がもんあげましようか、そりや久松かたじけない、老いては子に従えじや、孝行にかたみ恨みのないよう、お光よ三里をええてくれ、あい／＼そんなら風の来ぬようにと、何がな表へ當り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ、もゆる思いは娘気の、細き線香に立つ煙、詞ざあ／＼親子とて遠慮はない、芟もんべきも大つかみにやつてくれ、あい／＼きつうつかえてござりますぐえ、そうであろう

うである、ついでに七九もやつてたも、おつとこたえるぞ、こたえるぞ、さあすえますぞえ、あつづく、えらいぞく、明日が日死のうと火葬はやめにしてもらいましょう、丈夫に見えてももう古家、家根も根本もこりや一時に割普請じや、あつつつおお、父の仰山な、皮切りはしまいでござんす、風が当ると思や、誰じや表を明けたそな、しめて参じよと立つをひきとめ、はてよいわいの、昼中にうつとしい、のう久松久松／＼こりや久松、よそみしていと、しか／＼ともまぬかいの、さあよそみはせぬけれど、のぞくが悪い、折が悪い／＼と目顔のしかた、詞や悪いの眼くのと、足に灸こそすえておれ、どこもお光は覗きはせぬ、さああの悪いといいました、たしか今日は薬燐日、それに灸は悪い／＼悪いというたのでござります、ええ愚痴な事を、このように達者なは、ちよこ／＼灸をすえ作りをする、そこで久作、あつつつ、ええ何じやわい、わが身たちも達者なよう、に灸でもするが、おいらへの孝行じやぞや、お、そうでござんすとも、久松さんには振袖の美しい持病があつて、招いたり呼び出したり、憎てらしい、あの病いづらが入らぬよう、に、敷居の上へ大きゅうしてすえておきたい、これお光殿、振袖の持病のと、いろ／＼の耳こすり、はしたない事きいてはいぬぞや、ほほほほ、変つたことがお気にさわった、おおさわらいじや、こりやおかしい、そのわけきくぞえ、いうぞやと、われを忘れていさかの、外にきく身の氣の毒さ、振りの肌着に玉の汗、久作ももてあつかい、詞ああこりや肩も足もひり／＼するがなするがな、まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかいの取越しかいや、灸業のかわり喧嘩の行司さすのかいやい、二人ながらたしなめたりなめ、いえ／＼構うて下さんすな、今のような愛想尽かしも、病いづらめがいわしくさる、何をいうやら、もう／＼両方ともおれが貴いじや、よよ中直しがすぐ取り結びの盃、髪も結うたり鉄漿もつけたり、湯も使って花嫁御を、こりや作つておけとうち笑い、無理に納戸へ連れて行く。

ヘその間おそしとかけ入るお染、逢いたかつたと久松にすがりつけば、詞ああこれ声が高うござります、思いがけないここへはどうして、訳をきかして／＼と、問われてよう／＼顔をあげ、詞わけはそつちに覚えがあろう、私が事は思い切り、山家やへ嫁入りせいと、残しておきやつたこれこの文、そなたは思い切る気でも、わしや何ばでも得らぬ、あまり逢いたさなつかしさ、もつたいい事ながら、親音様をかこつけて、逢いにきたやなら南やら、知らぬ在所もいといはせぬ、二人一緒に添おうなら、飯も焚こうし織りつむぎ、どんな貧しい暮らしでも、わしや嬉し

いと思うもの、詞女の道をそむけとは、きこえぬわいの胴慾と、恨みのたけを友禅の、振りの袂に北時雨、晴れ間はさらになかりけり、疊りがちなる久松も、背なでさすり声ひそめ、詞そのお恵みはきこえてあれど、十の年から今日が日まで、船車には積まれぬ御恩、仇で返す身のいたづら、冥加の程も恐ろしければ、委細は文に残した通り、山家やへござるのが、母御へ孝行家のため、よう得心をなされやと、いえどいらえも涙声、詞いやじや／＼わしやいやじや、今となつてそういうのは、これまでもに隠しやつた、いいなづけの娘御と、女夫になりたい心じやの、せひ山家やへ行けならば、覺悟はどうからきわめていると、用意の剃刀とり直せば、これは短気と久松がとめてもとまらず、詞いや／＼そなたに別れ片時も、なに楽しみに生きていようと、とめずと殺して／＼と思いつめたるその風情、詞そんならこれほど申しても、おききわけはござりませぬか、添われぬ時は死ぬるという、替紙に嘘がつかりようかいのう、はアたつて申せば主殺し、命にかえてそれほどまでに、思うが無理か女房じやもの、かなわぬ時は私も一緒に、お染さま、久松と、互いに手に手をとりかわす、惡縁深き切りかや、始終うしろに立ち聞く親、詞その思案悪かろうと、いわれてはつと久松お染、さわぐをおさえ、おお大事ない大事ない、詞まあ／＼下にいや、因縁とはいなながら、和泉の国石津の御家中、相良丈太夫様といふれこさの息子殿、いささかの事で家がつぶれてから、わが身の乳母は俺が妹、その縁で十の年まで育てあげたこの久作は後の親、草深い在所に置こうより、智恵つけのため油屋へ丁稚奉公、それほどまでに成人して、商いの道読み書きまで、人並みになつたは親方の大恩、その恩も義理もわきまえぬはこれ見や、先に買つたお夏清十郎の道行本、嫁入りのきまとてある、主の娘をそなかすとは、道知らずめ、人でなしめ、なこりや清十郎が咄しじやわいの、とうから意見もしたかつたれど、今のような事があろうかと、それが悲しさ一日のび二日のばしする間、ふつてわいた金のもめ事、これいたてに暇をもらい、わけておくのが上分別と思うから、引き負いの金の工面、どのようにきばつても、たかの知れた水呑百姓、わざかの田地着類清十郎を可愛いがつて下さるは嬉しいようで恨めしいわいの、きいての通りお光めと、女夫にするを楽しみに、病苦をこたえているあの婆様に

りに、そこらあたりに心もつかず、つばみの花を散らしてのけたは、皆おれが頃ながら、ゆるしてくれも口の中、きこえはかかる忍び泣き、詞がああ冥加ないことおつしやります、しょせん望みは叶うまいと思ひのほか、祝言の盃するよくなつて、嬉しがつたはたつた半時、無理に私が添おうとすれば、死なしyanすを知りながら、どう盃がなりましようぞいな、四人の涙八つの袖、榎並八ヶの落し水、膝の堤や越えぬらん、久作涙おしぬぐい、どうやらこうやら合点がいたそな、さぞ母御様が案してござろう、大事の娘御たしかな者に、いやそれに及ぼませぬ、母がたしかに請け取りましたと、いいつ入れば、詞やあ母様、はあつとばかりに言葉なくさしうつむけば、詞これお染、野崎参りしやつたときいてあんまり気づかいさ、いや気恵さみによからうと、あと追うきて何事も残らずきいた夫婦の親切、お光女郎の志、最前からあの表で、わしや拌んではかりいましたわいのう、さあ觀音様の御利生で、怪我あやまちのなかつた嬉しさ、これからすぐにお札参り、幸いわしが乗つてきた、あの駕籠で、これ久松、そなた堤、お染は船、わかれ別れに往ぬるのが、世上の補い心の遠慮、さようござりまするとも、お志じや乗つていにや、娘は船へと親々のことばに否もいかねる、駕籠の片羽のかた／＼に、別れて二人は乗り移れば、詞兄さんおまめでお染様、もうおさらばとことばまで、はや改まるお光尼、哀れをよそに水馴れ棹、船にも積まれぬお主の恩、親の恵みの冥加ない、とりわけお光殿、かなりくだるもの先の世の、定まりごととあきらめて、お年よりられた親たちの、介抱頼むといいさして、泣く音伏せ籠の面伏せ、船の中にも声あげて、よしないわしゆえお光さんの、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ、ああわけもないお染様、浮世はなれた尼じやもの、そんな心をもつたない、短気おこして下さんすな、おお娘がいう通り、死んで花実は咲かぬ梅、一本花にならぬように、めでたい盛りを見せてくれ、ずいぶん達者で、はい／＼お前も御無事で、お袋様もお娘御も、おさらばさらば、さらば／＼と遠ざかる、船と堤は隔たれど、縁を引き綱一筋に、思い合うたる恋中も、義理の棚情のかせ杭、駕籠に比翼をひき分く、心々ぞ三重へ世なりけり。

りに、そこらあたりに心もつかず、つばみの花を散らしてのけたは、皆おれが頃ながら、ゆるしてくれも口の中、きこえはかかる忍び泣き、詞がああ冥加ないことおつしやります、しょせん望みは叶うまいと思ひのほか、祝言の盃するよくなつて、嬉しがつたはたつた半時、無理に私が添おうとすれば、死なしyanすを知りながら、どう盃がなりましようぞいな、四人の涙八つの袖、榎並八ヶの落し水、膝の堤や越えぬらん、久作涙おしぬぐい、どうやらこうやら合点がいたそな、さぞ母御様が案してござろう、大事の娘御たしかな者に、いやそれに及ぼませぬ、母がたしかに請け取りましたと、いいつ入れば、詞やあ母様、はあつとばかりに言葉なくさしうつむけば、詞これお染、野崎参りしやつたときいてあんまり気づかいさ、いや気恵さみによからうと、あと追うきて何事も残らずきいた夫婦の親切、お光女郎の志、最前からあの表で、わしや拌んではかりいましたわいのう、さあ觀音様の御利生で、怪我あやまちのなかつた嬉しさ、これからすぐにお札参り、幸いわしが乗つてきた、あの駕籠で、これ久松、そなた堤、お染は船、わかれ別れに往ぬるのが、世上の補い心の遠慮、さようござりまするとも、お志じや乗つていにや、娘は船へと親々のことばに否もいかねる、駕籠の片羽のかた／＼に、別れて二人は乗り移れば、詞兄さんおまめでお染様、もうおさらばとことばまで、はや改まるお光尼、哀れをよそに水馴れ棹、船にも積まれぬお主の恩、親の恵みの冥加ない、とりわけお光殿、かなりくだるもの先の世の、定まりごととあきらめて、お年よりられた親たちの、介抱頼むといいさして、泣く音伏せ籠の面伏せ、船の中にも声あげて、よしないわしゆえお光さんの、縁を切らしたお憎しみ、堪忍して下さんせ、ああわけもないお染様、浮世はなれた尼じやもの、そんな心をもつたない、短気おこして下さんすな、おお娘がいう通り、死んで花実は咲かぬ梅、一本花にならぬように、めでたい盛りを見せてくれ、ずいぶん達者で、はい／＼お前も御無事で、お袋様もお娘御も、おさらばさらば、さらば／＼と遠ざかる、船と堤は隔たれど、縁を引き綱一筋に、思い合うたる恋中も、義理の棚情のかせ杭、駕籠に比翼をひき分く、心々ぞ三重へ世なりけり。

(劇場) 音楽として発展したのに對し、荻江節は、より繊細に唄う方向をねらって完成した。江戸幕末のイキな風潮をあらわした唄で、和らかな唄の方を特色とする。

この曲はその荻江節の中でも代表曲といわれる曲で、深川の名勝を近江八景になぞらえ、唄つてある。幕末の頃に出来たもので、四世荻江露友の作曲と伝える。

三下り／四季の姿のさまざまなれや、月雪花の顔と顔、色に目馴れて、香りになすみ、眺め多かるその中に、屏風にうつす深川や、はまりて濡るる袖が浦、入り来る帰帆の数々に、＼＼永代橋の水鏡、うつせば映る疊らぬ天下、一の鳥居の夕照は、家並静かに鄙さびて、またひとしおの、＼＼永代寺の晚鐘、聞いておどろく鳥もなし。冬の本場には雁落ちて、たぐいなづなの春景色。あれ見よさんさ、これ見よさんさ、さんざやんさで走るさざ舟。＼＼客は船拍子おも楫や、とり楫、舟は變ろと主かわらずに、来てくれ河岸に、それそれ舟が、＼＼月まだかにや塩浜の、秋は短かき夜半なりと、思い合うたる仲町の、そもそも土橋の渡り初め、逢い初めし夜が縁じやもの。心と心が合点なりや、指切り、髪切り、入ればくる。＼＼野暮な起請も神々さんへ、お世話をかける筈もなし。ああ辛氣ああ辛氣。口舌洲崎の風も晴れて、富士をいただく明日の夜は、＼＼伊の雨に千鳥啼く、恋しさよ、ゆかしさよ。都の風の吹かまほし。＼＼時去り時うつり、朱の鳥居のありがたや、これぞ名に負う八幡の、官居涼しく幣とりあえず、＼＼神のいさめの神子の鈴、ふるやふるふる、二軒茶屋の暮の雪。ききしにまさる八景は、おもしろや、面白や、＼＼あれあれ、あれを見渡せば、冲の鷗のあなたへひらり、こなたへひらり、漁る業や曳く網の、いともかしこく見えにける。

### 三、長唄臥 猫(ねむり猫)

明和四年(一七六七)三月に歿した鳥羽屋三右衛門が作曲した三番の秘曲の一つ。当時の長唄としては、珍らしく芝居とは関係がない。日なたで居眠りながら、蝶に戯れる猫を描写した曲。

三味線も唄も思い切って皮肉にできた曲で、難曲といわれている。なお、詞の三味線は三世杵屋勘五郎が補足したもの

のといわれている。

荻江節というのは、長唄からわかれので、長唄が舞台

二、荻江節 深川八景

ふかがわはつけい

のといわれている。

本調子へ見しやそれぞと憧れて、ことしたうるや雲井音に、男猫を待てば妻を持つ、他生の縁に眠る猫、莊子が夢のそれならで、のう、目ざましぐさに飛ぶ蝴蝶。一上りへ春の猫の、ねこの子の、猫のねこの、猫の子猫が、日影にねむりて飛ぶ蝶を、ふと目にかけて、とびあがりては、ひらり、ひらり、ひらりひらりと戯れ遊ぶ。＼＼夏は蚊帳の裡にすがりて、本調子へくるくるくると、もつれて遊び、または色よきまがきの菊に、さきさきりきくきりみききり、卯の花卯の花、卯の花咲ける、垣根の下をくるりくるり、めぐり廻りて立木に登る。二上りへ秋は草葉にすぐくなる、虫の声々、きき立てて、あなたへ走り、こなたへ走り、ぬき足さし足、またかけめぐり、＼＼鼠めが、さんのやなにに登寝して、猫にとらるる夢を見た、守りかけたよ、除けの守り、猫にとらるる夢をみた、まもりかけたよ、よけのまもりを。

本調子へ見しやそれぞと憧れて、ことしたうるや雲井音に、男猫を待てば妻を持つ、他生の縁に眠る猫、莊子が夢のそれならで、のう、目ざましぐさに飛ぶ蝴蝶。一上りへ春の猫の、ねこの子の、猫のねこの、猫の子猫が、日影にねむりて飛ぶ蝶を、ふと目にかけて、とびあがりては、ひらり、ひらり、ひらりひらりと戯れ遊ぶ。＼＼夏は蚊帳の裡にすがりて、本調子へくるくるくると、もつれて遊び、または色よきまがきの菊に、さきさきりきくきりみききり、卯の花卯の花、卯の花咲ける、垣根の下をくるりくるり、めぐり廻りて立木に登る。二上りへ秋は草葉にすぐくなる、虫の声々、きき立てて、あなたへ走り、こなたへ走り、ぬき足さし足、またかけめぐり、＼＼鼠めが、さんのやなにに登寝して、猫にとらるる夢を見た、守りかけたよ、除けの守り、猫にとらるる夢をみた、まもりかけたよ、よけのまもりを。

### 四、三曲小督 曲

山田流々祖山田検校(一七五七)一八一七)が、平家物語

の小督の故事を題材にして作曲したもので、山田流でもっとも重く取り扱っている奥許しの四つ物の一つです。平清盛に憎まれて、嵯峨野の奥にかくれ棲んでる高倉天皇の龍妃小督局を、勅命をうけて探しに行つた仲国が、小督の奏てる筝の調べをたよりに探し、ふたたび宮中に迎えるという筋ですが、この曲はあくまで叙景・抒情に比重がおかれています。

筝は片雲井調子、三絃は低二上り調子ではじめ、まもなく雲井調子と三下りになります。このはじめの部分は、嵯峨野の秋の情景をあますところなく描いています。＼＼想夫連の唱歌は……のところは、樂といつて、雅樂のシズガキの手が用いられています。

### 五、筝曲五段砧

この曲は純箏曲で、三絃の手はありません。箏の手も高低

二部で、高い方が雲井、低い方が平調子です。この二部合奏の新作に五年間を要したとのこと、作曲者は京都の名作曲家として有名な光崎検校です。この人は編曲禁止を破つて秋風の曲を組として作ったというので、京都を追放され、加賀の金沢で歿したという悲運の人です。

名曲をたくさん残された中の一つがこの「五段砧」で、二部高低の合奏がその妙を尽くし、現代流行曲の一つとなつております。

### 六、清元道行浮塙鷗(お染)

＼＼牡鹿鳴く、この山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋の頃、千種の花もさまざまに、虫の恨みも深き世の、月に松虫招ぐは尾花、萩には露の玉虫

四世鶴屋南北作詞、清元斎兵衛作曲。文政八年(一八二五)

十一月、江戸中村座で「鬼若根元台」という顔見世狂言の二番目序幕に初演された。

お染久松の情死事件は、もとて大阪のことで、今日も第二部のはじめに演奏される義太夫の「新版歌祭文」などで知られている。ところが清元ではこれを江戸におきかえ、場所も隅田堤にとって、江戸化しているのが特色である。

曲も清元の道行ものの代表曲といわれるほどの名曲で、舞踊としてもよく上演されている。

内容は、油屋の娘お染と丁稚の久松が、想う仲が添われぬのを悲しんで心中しようと隅田堤へやつてくる。そこへ猿廻しが来かかり、二人の様子を見て猿まわしにかこつけ意見をする。が、二人ともやはり死なねばならぬと、その用意をするまで。

「今も昔は瓦町、名代娘のただ一人、おくれ道なる久松も、まだ咲きかかる室の梅、畠の花の振り袖も、内を忍んでよう／＼と、そこで互いの約束は、心もほんに隅田川、人目堤の川岸を、辿り辿りて来りける。久松／＼モシお染様、如何に深い御縁とはいひながら、お主の娘御を連れまして死のうなぞとはもつたない道知らず、いわば現在主殺しも当然」

お染／＼コレイナア久松、またお主といやるかいの、互いに死のうと覚悟して、内を出たのはそれも何故、そのように二人一緒に居ればこんななうれしい事はないわいの。久松／＼イエ／＼今になつてこの身をいとうのではござりませぬが、私と一緒にお果なされでは第一お家へきづのつくこと、どうぞ貴女は永らえて、夜の明けぬ間に内方へ、モシお帰りなされて下さりませ。

「お染はじつと顔を見て、あれまたあんな無理いうて、そんなその様ないいわけを、へ小さい時からなまなかに、手習いでも一つ所、何やら草紙へ書いたのを、へうらみつらみも何からと、袖に縋りて涙ぐむ、娘心ぞ可愛らし

久松／＼ヤ誰やら向つへ、サ暫し木蔭へ。

「朝潮が筆を写し絵に、まねて二升の彩色も、三筋は足らぬ猿曳が、二上り／＼得意廻りの口祝い、宿の出がけにや嬢衆とさしで、ぐつと熱燄お染／＼それじやによつて、わたしや覺悟を、

久松／＼お染さま、

お染／＼久松、

「顔見合させて目は涙、今は二人もつかの間に、弥陀の御国に隅田川、蓮の台の新世帯、いざ言問わん都鳥、あしと橋場の明け近き、はや長命寺の鐘の音も、ここに浮名や流すらん、ここに浮名や流すらん。お染／＼二人一緒に、久松／＼お染さま、

お染／＼かすみのさるひき  
はなぶたいかすみのさるひき

## 七、常磐津 花舞台霞の猿曳(うつぼ猿)

二世中村重助作詞、五世岸沢式佐作曲。天保九年(一八三八)十一月江戸市座初演。

狂言の「鞆猿」を脚色したもので、すつかり歌舞伎化されているのが特色。舞踊としても今日大いに流行している。

奥・女中の三芳野が、主人の名代で鳴滝八幡に参詣するため、奴の橋平を連れて来かかります。そして、主人のいつけで大内で用いる鞆(矢を入れるいもの)の皮を探していることを話しているところへ、一匹のはなれ猿が走つてきます。それでこれ幸いと連れ帰ろうとします。そこへ猿廻しが追つて来て猿を返してくれと頼みますが、きき入ません。それで猿廻しはあきらめ、猿に因果を含めて手ずから打ち殺そうとすると、無心の猿はそれとも知らず、しきりに船をこ

ひつかれたえ、顔は太夫と花紅葉、へまさる目出度や真赤いな赤かんべ、べい／＼本調子へ独樂じやなつけれど、くるりやくるりのら廻り、くるりと廻つて菜種の蝶よ、へ流れ渡りの隅田堤、機嫌上戸の気も軽く、浮かれ拍子に来りける。

猿曳／＼イヨー／＼よなめくなく、見れば男と女の二人連れ、ハハアコリヤてつきり三囲りのレコさがおれを化かしに出たな、よし／＼お猿ならば太夫が爪で正体を、

久松／＼アアコレ滅相な、お染／＼そのようなものじやないわいな。

猿曳／＼やそんならこなさん達は人間か、テモマア美しいものじや、してまたなんで夜更けにこの辺へ、久松／＼アアソレハオオソレ／＼、この三囲りの稻荷様へ年まいりに来ましたわいな。

久松／＼アアコレ久松、もうやがて夜明け、お染／＼コレ久松、もうやがて夜明け、久松／＼ドレそろ／＼と参りましようか、

猿曳／＼オット待つたり、やそれでお前方の身の上もその前髪といい、この娘のお娘が今久松といったからは、いよ／＼この頃噂のある、

兩人／＼エエ、猿曳／＼マ……何であろうとわしがいう事を、ハテマア聞かつしやりませヤヤア

「ここに東の町の名も、聞いて鬼門の角屋敷、金瓦町とや、油屋の一人娘にお染とて、へ年は二八の細眉に、内の子飼いの久松と、へ忍び忍びの寝油を、親達や夢にも白絞り、へ二人は畠の花盛り、絞りかねたる振りの袖、梅香の露の玉の緒の、末は互いの吉丁字、そこで浮名の種油、

意見まじりに興じける。久松／＼すりや世間ではそのように二人が事を、猿曳／＼門附または唄祭文、浮名の立つをうたてく思い、ひょんな心にならしやぬよう、

兩人／＼エエ、猿曳／＼春を取り越すお猿萬歳、御寿命長久祝うてここで、ヤ奏でましょうか。

「猿若に御萬歳とは、櫛も栄えてましんます、青陽新玉の年立ち返る周の春、愛嬌ありけるばつとりもの、へ一八十六で諸人のひっぱる色娘、

御苦労に存じます、いえ、その御苦労は樋平殿も互いの事、願い叶うてまた今年、お前と二人物詣で、こんな嬉しい事はござんせぬ、もう御大名へ頼うだお人は北面の、更科主人経春様、今日例年の弓始め、なお泰平を祈りのため、この鳴滝の八幡宮へ、御名代の三芳野殿、お役目御用であらば横柄に、太郎冠者あるかやい。へはあ御前にとうづくまる。へこちもとより使われよ、色恋の道しら川や、人目の閑の袖襷ならで、網引き餌引き四ツ手引く、山じやえ、山じや木を挽く麦の白、廻らばまれ伊勢道者、昔は車今は錢、投げさんせ／＼、縞さん紺さん花色さん、こうれこれ／＼小紋さん、やてかんせと、引き戻されたあ長繩じた。戻りには鞆になる皮をととのえて来いと、いいつかつて來たわいな。へはて女中には似合わぬことを仰つしやりつけでござりますなあ。何故でござりますな。へさあ、御主人経春様、毎年の吉例ゆえ、弓矢と鞆をこのように持たせて、氏神様へ奉らせ給えど、今年はこう鞆が損じた。戻りには鞆になる皮をととのえて来いと、いいつかつて來たわいな。へはて女中には似合わぬことを仰つしやりつけでござりますなあ。へ話し半ばへ向うより、手飼いの小猿の折よくも、二人が中へかけ込めば、びっくり飛びのき、へあ何だと思つたら、こりや猿であつたわえ。へおお、ちよとなどところへ離れ猿、皮をとつて幸いの鞆に。へいえいえます。へそんならその主に断らいでは悪いかな。へなにしろこの主に逢いたいものだなあ。へ見るやこなたへきよろ／＼目。へこちら在所

の得意旦那をくるりくるりと猿廻し。二上りへ隣り村から今日この村の、葺屋町へと御観戻の、風に廻されまつかいな赤かんべ、初心は知れた初舞台、罷り出たらめ出放題、酒のさの字のその暇に、見失つたる猿丸の、迷子のまいごのお猿やい、と呼子鳥、紅葉にあらで咲きまさる、まさるまでたき猿曳きが、紋もでつかい裏梅が、梅の林をうかれくる。へおお太夫ここにいたか、さ、ここへ来い／＼、寄るを隔てて、へすりやその猿の主は貴様か、これ／＼何と物は相談じやが、その猿をどうぞゆすつてはくれまいか。へめつそな、この太夫殿を手放しまして、明日から商売がなりませぬ。

女中は、更科主水経春様というお大名の御代参、今度賭弓の御遊に、大

内で用ゆる鞞に猿の皮が入り用じやほどに、あなたに猿を売つてはくれまいか。

へいえ何ばう大内の御遊でも、これはばかりは御めん下さりませ／＼。

詫ぶるに、へこなたはつけあがり、へそんならどうでもならぬといやるか、女とあなどり上様の、上意をききやらねば仕様がある。

へ素袍投げかけ大名の、威を張りつめし弓張りの、矢先鋭く立ちかかる。

猿曳きおどろき飛びしさり、へあもし待つて下さりませ、なるほどこ

うなるからは、猿の皮をあげましよう。へそんならきつと打ち殺して、さ、早う渡せ。へはつ。へ畏こまつてござると立ち上

り、またあるまじき御望みは、ただ今殿様殺せとある。ならぬといえば

俺ともに、ただ一矢にて射殺すと、ひくに引かれぬ強弓の、仰せはかな

き今日の仕儀、へこれまでよ、へ小猿の時から飼いおいて、へ朝夕の煙

さえ、そちがかけにて樂々と、暮せしものを情ない、へ畜生なれどもよ

うきよ、へせめて今度は人間に、生れ變つてくるように、教えこんだ

る一節に、へええ、さりとは／＼、ええ、またあつかいな、さんな、ま

たあろか이나。へ是非なくなく立ち上り、振りあけし鞭の下、廻る小

猿のいじらしさ、へあれ／＼今を御覽なされしか。打ち殺さる鞭と

は知らず、船漕ぐまねをしまするわいの。へそんなら何という、殺さる

とは知らいで芸をするかや。へ畜生でさえ物を知るに、いかに生命な

ればとて、へものあわれもかえりみず、どうしてそれが殺されよう。

命を助けて連れて帰りや。へええそれはまことでござりまするか。へお

いのう。へやれ／＼嬉しや／＼お礼に猿をまわせましょう。天下泰平御

武運長久御祈禱に、猿が參つて能つかまつる。へ御知行も、まさるめでたき、踊るが手許おもしろや。ほんやこりや／＼、黄金の数々積み揃え、庭に黄金の花盛り、花実も榮うめでたさよ。(中略)へそうに三人立ちかかり、届かぬ梢の綱渡り、三筋の霞猿曳きや、橋かおる花舞台、笑い興じて祝しける。

## 御 礼 邦 樂 連 合 会

本日はよ／＼こそお出かけ下さいまして、ありがとうございました。この会も回を重ねまして、ごらんの通り五回目の演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

この、ようにして、邦楽の各流派が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからも、この会は続けて行きたいと思つておりますし、またこの催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合つたりして、よりよい明日の邦楽のために努力して参りたいと思つておりますので、今日おさき下さいました御意見や御感想などを、どうぞお寄せ下さいますようにお願ひ申し上げます。

何かと不行届の点もありましようが、お許しを願いまして、どうぞ御ゆつくりとお楽しみ下さいますよう、御願い申し上げます。